

あたしはいつまで怒った振りをしてればいいんだろ。
そう呟いてみたところで、何か状況が変わる訳じゃないんだけど。

1

視界が曇っているようなぼやけているような、変な感じ。

眼鏡を外して確かめると、べったりと指紋がひとつ付いていた。そういえばさつき触っちゃった気もする。ネクタイの裏側で拭いて、そっと持ち上げた。うん、新しい眼鏡は気持ちいい。

弦もゆるんでないし、パッドもきちんと揃ってるし。……普通に使ってた
ら平気じゃない？ とよく言われるけれど、かけたまま寝落ちしてしまうこと

が多いだけに、なるべく丈夫そうなデザインを選ぶようにしている。

赤、というかマゼンタのフレームは、新品らしさを物語るようにつやつや光っていた。よいしょ、と眼鏡をかけ直して、目の前の黒板を眺める。クリアな視界。うんうん。

はいそんじや部会終わりまーす、お疲れさまー。その声とほぼ同時に全員が立ち上がる。定例の部会は空き教室を使っているから、終わったらそのままみんなで部室になだれ込むのがいつものパターンだ。

文芸部、という目立たなきそうな名称の割に部員数はそれなりにいる。

各学年に二、三人ずつというのが多いのかどうかはさておき。一年生はあたしと諾子、二年生が千佳子さんと袖季さん、それから戸波さん……そういうえば袖季さんと付き合ってるんだっけな、という情報も一緒に思い出す。

そして、三年生はふたり。なるべくなら顔を合わせたくない、というのがこのふたり。……なんだけど、こうやって定期的に集まったり、不意に部室で出会したりするから、いかんともしがたい。

あたしはその波に加わらず、お疲れさまでしたー、と頭を下げて逆方向へ。

こういうとき変に引き留めたり嫌みを言ったりしないひとたち、っていうのはほんとに助かる。それだけいいひとたちなんだよな、って分かってはいるんだけど。

「あ、わたしもお疲れさまです！」

それに続いてとつとつとつ、と駆け寄ってくる足音が聞こえてくる。

「香ちゃん、今日どっか寄ってく？」

「別に付き合ってくれなくてもいいのに」

「違うよ、わたしが香ちゃんと遊びたいだけ」

んー全然考えてなかった。ちよつと帰る前に図書館だけ行くけど。あ、ほんと？ わたしも何か借りてこうかな。あたしは返すだけだからすぐだけど、借りたいの決まってるなら待つよ。それなら明日でいいや、ちよつと昼休みカウンターだし。そんな会話でじゆうぶんだった。とりあえず早めに学校を出たい、っていうのは伝わっている。

別にそのまま図書館で時間を潰したって構わないだろう。でもやっぱり、何となくこういう日は早く上履きのサンダルを履き替えたい。

よく分からないけど、そういう気分だ。



それなりに仲はいいのかな、と思う。

最初に会ったときから何だかんだと話しかけてくれたのが諾子で、最初に泣き顔を見られたのも諾子だった。三年生のふたり——水崎^{みづまき}さんと神谷さんと、あたしのことで相談に乗ってくれたのも。

けれど、あたしはそんな彼女に対して、割と雑な扱いをしてしまっている。性格といえど、あんなのかもしれないけれど、それで済ませてしまっているのかどうか。ぶつきらぼうというか、適当というのか、自分でも分かってるのに、あたしは諾子のひとのよさに甘えっ放し。

よくはない、よなあ、と思うのに、その辺りは変わらない。

2

香ちゃん、と呼び止められて。僅かに立ち止まって、それから何事もなかったように歩き出す。あーちょっと待ってよー、という声が慌ただしい足音と一緒に追いかけてきて、そこまですごいもの流れ。

ちゃりん、と硬貨を入れて、自販機のボタンを押す。がこん、と出てきたブリックパックのアップルティーを拾い上げて、そこで初めてあたしは振り返った。

「そんな騒がしくしなくても聞こえてるってば」

ね、おひるもう食べちゃった？ その問いに首肯でこたえて、あたしはバックにひつついていたストローを伸ばす。そかそか、わたしも食べ終わってるんだー。諾子の言葉に、たぶんあたしの顔は分かりやすいくらい引き攣っていたんじゃないかと思う。